

(2) 静岡のお茶の歴史

<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 広々とした茶畑が 広がる風景</li> <li>○ 茶葉の美しさ</li> <li>○ 峠の峰々の様子をパン</li> <li>○ 大日峠のお茶蔵</li> <li>○ 蔵出しの儀が始まっている</li> <li>○ 茶壺を蔵から駕籠へ</li> <li>○ 駕籠に乗っている茶壺</li> <li>○ 祝詞をあげる神職</li> <li>○ お茶蔵の前で関係者ヒキ</li> <li>○ はためく幟「駿府御用茶」</li> <li>○ 出発する行列</li> <li>峠から出てゆく様子</li> <li>○ 口坂本の山道を行列来る</li> <li>○ 谷川の橋を渡る</li> <li>○ 柿島町内を来る行列</li> <li>○ 茶畑の横を通る行列</li> <li>○ 街道をゆく</li> </ul>	<p>駿府本山お茶壺行列</p>	<p>お茶蔵(復元)</p>	<p>ナレーター 田畑智子</p>	<p>スル に しよつしよひらこくし 円爾(正一国師)</p>
<p>静岡を代表する農産品・お茶の栽培は、およそ770年前、駿河生まれの僧・円爾が、唐から持ち帰った種を故郷の近くに播いたことが始まりとされています。</p> <p>江戸時代には、郷里のお茶を大変好んだ徳川家康が、春の一番茶を涼しい峠のお茶蔵で保存し、秋にお城まで運ばせたといわれています。</p> <p>その駕籠行列が再現されています。</p> <p>「駿府本山お茶壺道中行列」の一行が、茶壺を久能山東照宮へと運びます。</p> <p>♪ わらべうた「ずいずいずいずいずい」</p> <p>私たちが良く知っている『わらべうた』「ずいずいずいずいずい」は、お茶壺行列が通る街道筋で農作業が禁じられたことを風刺した唄だとも言われています。</p>				

<ul style="list-style-type: none"> <li>○住民たちが見物している</li> <li>○朝倉家跡に入ってゆく</li> <li>○朝倉家跡の広い空間を 行列してゆく一行</li> <li>○久能山の全景</li> <li>○東照宮の楼門</li> <li>○行列が石段を登る</li> <li>○本殿へと向かう一行</li> <li>○「口切の儀」が始まる</li> <li>○茶壺にナイフ、蓋開く</li> <li>○中のお茶袋を取り出す</li> <li>○出てきたお茶袋</li> <li>○宮司が神前に奉納</li> <li>○神前に奉納されたお茶</li> <li>○足久保の芭蕉の句碑と 茶畑の風景</li> <li>○中條景昭の像</li> <li>○広い茶畑を見下ろす 中條景昭像</li> <li>○大井川を見下ろす 大茶園</li> </ul>	<p style="text-align: center;">久能山東照</p> <p style="text-align: center;">口切の儀</p> <p style="text-align: center;">芭蕉の句碑（狐石） 句を文字で</p> <p style="text-align: center;">ちゅうじょうけいあき 中條景昭像</p> <p style="text-align: center;">牧之原台地</p>
<p style="text-align: right;">わらべうたに唄われたのは、それだけ当時の人たちの暮らしとお茶との係わりが、深かったからではないでしょうか？</p> <p style="text-align: right;">家康公を祀る久能山東照宮の本殿へと向かいます。</p> <p style="text-align: center;">   太鼓が打ち鳴らされる   </p> <p style="text-align: left;">茶壺が本殿に到着すると、茶道の家元が封を切り、中のお茶を神前に奉納します。</p> <p style="text-align: left;">江戸時代の俳人・松尾芭蕉も「駿河路やはなたちばなも 茶のほひ」と詠んでいます。</p> <p style="text-align: left;">明治になると、旧徳川家の家臣団が、当時荒地だった牧之原台地を大変な苦勞をして開墾。現在のような大規模な茶園が広がる基礎を築いたのです。</p>	

○杉山彦三郎の頌徳碑

○「茶樹品種改良」の

文字 UP

○やぶきた原樹ロング

○茶摘み風景の古い画像

・手摘み風景

・はさみで摘み取り

○柔らかい茶葉の様子

○湯呑のお茶 UP

○お茶をおいしそうに飲む姿

資料映像 やぶきた原樹 杉山彦三郎頌徳碑

また明治時代はお茶の樹の品種改良も盛んでした。現在の静岡市で生まれた杉山彦三郎は、明治四十一年、北側の竹藪<sup>やぶ</sup>を開墾した茶園で育てたお茶の樹に「やぶきた」と名付けました。

それ以来、甘みのある独特の味と優雅な香りを持つ、優れた性質の「やぶきた」種は、日本のお茶の代表品種として愛されてきました。

今では日本中の80%近くの茶園で栽培されているのです。